様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０２７６

研究課題名（和文）第二言語としての日本語学習環境下（ＪＳＬ）で可能な「教室外学習実践」の質的検証

研究課題名（英文）Qualitative interactional analysis of informal learning process in JSL contexts

研究代表者
池田　佳子（IKEDA, KEIKO）

関西大学・国際部・准教授

研究者番号：９０４４７８４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円、（間接経費）　　780,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、個人差に起因する要素の中でも、学習目的でないインフォーマルな学習実践、たとえば日々の生活の中や課外活動の中で偶発的に起こるインタラクションを通して実現する学習の有無、またその実践の具体的な内容が要因解明の鍵となると考え、その「個人差」の実態とありかの解明を目指すものである。
さまざまなインフォーマルな学習者の相互行為場面を考察したが、その中でもICTを介して活動する場面、特にPBL(Project Based Learning)場面に着目し、その中で学習者らがどのような偶発的な学びを展開するのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：This study examined informal situations for the international students in Japan where language learning takes place naturally, for example, various daily social activities and extra-curricular activities outside of the classroom during the study abroad period . The study has focused particularly on their interaction surrounding ICT-tools (e.g., use of SNS, Skype, blogs, internet search engines) in PBL(Project Based Learning) activities. A conversation analytically informed, multimodal interaction analysis was adopted to analyze the collected interactional data. The findings show that their engagement in the given activities beyond language learning would provide a rich, context-driven moment for learners to acquire various dimensions of communicative competence in the target language (Japanese). The study suggests that development of interactional competence in L2 may be in fact possible only in such informal learning settings.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語学習者　ICT活用　会話分析　インフォーマル学習　マルチモーダル分析

１．研究開始当初の背景

現在日本では「留学生 30 万人計画」が国家戦略として位置づけられている。日本がより多くの留学希望者にとって魅力ある留学先となるためには、受入環境の整備や就学中の生活への配慮向上への施策が必須である。多様な留学生のニーズの中でも、第二言語としての日本語の教育環境の改善は、環境整備を行う上で根幹となる課題の一つであろう。このような背景を踏まえ、本研究は、第二言語としての日本語学習（以下 JSL）環境での言語習得の最大の利点である、教室外での「インフォーマル」な活動による学習効果に着目する。学校などの「教育・指導が執り行われる場所」に限らず、企業、家庭、特定のコミュニティやそこでの活動の中にも学びの機会は潜在する。従来の第二言語習得研究(以下 SLA 研究)では、教室などの言語指導が直接的に展開する場面での調査が主流であった。教室外学習に関しては、国内外ともに心理学的「実験」ベースの検証や、調査用紙によるアンケートやインタビューといった「自己申告型」の調査結果に基づく学習者理解に限定される傾向が見られる。しかし、最近になり、学習のあり方、人々の相互関係やそこで成立する「指導」「知識伝達」の実態は、実際にどんな場面で、どのようなインタラクションが展開するのかを質的に調査せずに解明はのぞめないと主張する研究がようやく増え始めた。本研究もその動きに賛同し、学習者の言語行動の詳細なエスノグラフィーを実施する。会話分析法、ジェスチャー分析、身体の動きなどを捉えるマルチモーダル研究といった質的なインタラクションの分析法を用いて各自の言語活動を調査し、言語習得過程を包括的に捉えていく。

２．研究の目的

本研究は、日本国内で言語学習を行う、JSL(Japanese as a Second Language)環境の学習者の学習活動の多様な実態を縦断的質的調査によって明確化し、個々の学習者の現実的なニーズと現代日本社会の生活スタイルに見合った、多彩な学習機会を促進する言語教育のあり方を提案することを目的とする。一言に言語学習者と言っても、どのような理由で、またどのような生活環境において対象言語を学習することができるのか、多側面におけるアフォーダンスが異なることを看過せず、あえてこれらの多様性をアドバンテージに、個々がどのような学習の場を教室外に創出するのかを洗い出そうとするものである。

３．研究の方法

本研究では、教室外学習の状況に加えて、多様な教室環境における学習者の学習実態を調査するため、PC 教室や講義型授業、および課外授業活動などにおける学習者の談話データを収集し、さらに分析を行った。具体的なデータ収集は、①授業内外における参与観察、②音声またはビデオによる定期的なインフォーマルな学習場面の談話場面の録音・録画、③学習者との定期的なインタビューおよびフォーカスグループディスカッションなどである。

具体的には、平成 23 年度には桜の花見行事や、交流ラウンジでの会話など、留学生と日本人学生の交流場面を単発的に機会が生じる毎に録画録音を行い、談話資料を収集するという作業を続けた。また、教室内においても、授業にて課されるタスク以外に、学習者らがインフォーマルに展開する会話などが観察されることから、授業時間のビデオ録画も開始した。平成 24 年度はデンマークのロスキレ大学の研究者の協力を得て、日本とデンマークの local language（現地語）の学習がどのように展開しているのか、比較と考察を行った。ロスキレ大学にて留学する留学生らとの交流の機会を持ち、彼らがデンマークに到着してから数日のオリエンテーションと Foundation Course という特別な言語授業などを見学し、現地語の扱いと、留学生らに現地語が社会言語学的にどのように必要とされているかを実体験し、さらに先方の研究者らが来日した際にも、研究会を行い、国内外の留学生らの現地語学習の現状についてさらに理解を深めるという活動を行った。研究成果にあるように、この活動は編著として顕すことができた。

平成 25 年度後半から平成 26 年度にかけては、「インフォーマルな学習場面」がおこりやすい PBL(Project Based Learning)の機会を多く設け、ここに参加する日本人と留学生らの相互行為場面の録画収録を集中的に行い、分析を行った。PC 端末や iPad など、ICT 機材が必ず介入し、さらに複数の参加者が一場面に介在するため、マルチモーダルな視点からの分析（PC 画面の録画なども含む）が最適の分析方法となった。

４．研究成果

本研究の成果報告としては、研究期間初年次から、海外の学会などにてその趣旨と初期段階の分析の経過などを公表してきたが、主な成果プロダクトとしては、まず平成 25 年度において海外著書 2 本と国内著書 2 本の出版が実現した。また、本研究の比較対象として扱っているデンマークの研究協力者と共に、「世界の国際教育」という大き

な枠組みの中で両国の言語学習者の実態に関する研究発表を平成 25 年 3 月に行った。平成 25 年度から 26 年度にかけて、成果出版に主に尽力をした結果、図書については、今後平成 27 年度に海外学会誌(Journal of Japanese Linguistics and Literature)と、国内図書(くろしお出版を現時点では予定)にて成果論文の掲載が予定されている。
以下、本研究における考察の一部を提示する。

４－1. からかい談話に生起するインフォーマル学習

断片 1 は、ベルギー出身の男性２名(BK/BU)とフランス出身の留学生（女性）１名の談話場面である。彼らは、会話の当初、授業のタスクとして「草食男子」という現代日本社会の若者の特徴を項目として挙げるという作業をしていたが、その途中からお互いのことについてからかいあう(Drew 1997)といったオフ・タスクの会話が展開した。断片 1 はその一部である。

断片1 “Greedy”

1 FA: BK *wa itsumo monku o itteru.*
2 BU: *monku: shoku. monku-shoku danshi.*
3
4 BK: he[heh
5 BU: [heh .hh heh! HEH!
6 FA: [° hehe °
7 BK: $*suimasen*.$
8 FA: *atarashii taipu ga dekita.*
9 BK: $*suimasen*.$
10 BU: *sooshoku danshi. mo*[*nku bakkkari*]
11 BK: [*suimasen* (.)]
12 ↑*gatsugatsu wa nan no imi desu ka.*
13 FA: *1 *e*? *1
14 BK: gatsuga[tsu.
15 BU: [*2greedy*2
16 (1)
17 FA: *3greedy.
18 BK: hh ↑ ah::↓
19 BU: yeah.
20 FA: *4g[reedy*4
21 BU: [*5greedy*5

*1 BU 下を向き、電子辞書を確認する
*2 BU 電子辞書から目をそらす
*3 FA BUの方を向く*4 FA BKの方を向く
*5 BU BKの方を向く
注：[ ]は発話のオーバーラップを示す

まず BU が、「BK はいつも文句を言う」とからかいの対象として発言をし、それに便乗する形で FA が「(草食男子ではなく）新しいタイプができた」と発言する。このからかいを受け、BK を含む全員が笑いを同時に行った後、BK が１０行目に見るようにタスク上で扱った草食男子の特徴を表す言葉の一つを取り上げる（「ガツガツ」)。この言葉を BU が電子辞書を確認する、という作業を引き継ぎ、英語の意味を提示する(14 行目)。17 行目では、BK が「あ：：」と意味の理解をしたことを周りに提示する。これを受け、FA が greedy と再度発音し、矢継ぎ早にそれぞれが greedy (19-20 行目)と繰り返している。このような、授業の課題としての語彙学習としてではなく、インフォーマルな対話が展開する中で、協働で未知の項目について解答を探し当て理解する、といったパターンがグループ活動の中で多く散見された。

４－２． IT が関与する相互行為におけるインフォーマル学習

断片 2 は、日本人学生１名(S3)と外国人留学生 2 名（S4 と S5）のグループでの作業中のインタラクションの一部である（図 3 参照)。彼らは、混合クラスの活動として、「大学に提言できること」についてテーマを決め、調査を行い根拠・裏付けのある主張・提案をするという課題に取り組んでいる。このグループは、最終的には「大学の国際化」というテーマを選択し、学期末のプレゼンテーション大会にエントリーし 3 位入賞となったチームである。この課題は学生らの自主的な作業運営に任されており、教員は必要な時にアドバイスを提供するのみとなっている。断片 3 は、グループワークの最初の週のテーマ決めを行っている場面で、お互いに課題の把握をしようとクラスの LMS(Learning Management System)ページを見直したり、それぞれの課題の理解の確認をしたり、という作業をしている場面である。

図 3 グループワークの様子

この断片において着目したいのは、参加者の参与枠組、とくに S5 の一連の相互行為シークエンスにおける参与状態の変化である。断片 3 の直前では、S4 が課題の詳細を示した情報がクラスの LMS ページに乗っているので、それに従って活動をすればいいと提案をした。それに対し、S3 はその情

報が、自身がアクセスできる LMS 上でどこにあるのかを見つけようとするが、見当たらない。S3 は S4 が指している課題の内容の事例がどのようなものかを確認し、その事例資料は S3（日本人学生）にはアクセスがないことを指摘している（留学生の LMS ページには、理解を助けるために課題の事例資料がのっているが、日本人学生の LMS ページにはのせていない）。断片 2 の 12 行目「こういうやつ」とは、この課題の前に行ったグループタスクにて教員から提供があった事例資料ハンドアウトを意味する。

断片 2

12　S3: こういうやつ？/((S3/資料を DL し画面に映し出す))
13　(.5)
14　S4: あ．そうそう.*3 (題名にし[た‥　]
15　S3:　　[これね:]ないのよ．おれこの画面は:*4
16　　留学生:あの[S4 ちゃんとか*5]S5 ちゃんとかのやつと違うのよ.
17　S4:　　[あ:::　　]
18　S3: そそそそそ.
19　(3)*6 /((S5 が自分の使っていた PC 画面からログインしなおす.))

*3「あそうそう.」

*4「ないのよ．おれの画面は」

*5「S4 ちゃんとか」

*6((S5 が自分の使っていた PC 画面からログインしなおす．))

12 行目で S3 が前回のタスクで配布された課題事例資料を画面に映し出し、S4 が「あそうそう」(14 行目)と返答をしている間、S5 は発言しておらず、視線のみを S３が映し出している PC 画面の情報を遠くから眺めている。この時点における参加枠組としては、S4 は PC 画面を指さし、さらに発話にて S３に応対するなど、積極的な相互行為の参加者としての役割を果たしている一方、S5 は自身の座る位置や体幹の距離を S3 と S4 からは少しとるような形をとっている（*3)。しかし、15-16 行目で S3 が「おれこの画面は」と発言し、S5 の前にある PC の方向を手で示すのと同時に、S5 は自分の見ている画面に視線を移動させる(*4)。次に、「S4 ちゃんとか S5 ちゃんとかのやつと違うのよ」と発言するのを受け、キーボード棚を引き出し（*5)、19 行目では LMS ページへの閲覧を行うために ID とパスワードを打ち込む作業をする(*6)。この断片では、S5 のグループにおける参加枠組の中の位置づけが、断片 2 の後半において活動の主体的なエージェントへと変化している様子が如実に観察できる。この「参加」の度合いを決定づけているのは IT メディアと参加者がどのようにかかわっているのか、そしてそれぞれの関わり合い方を参加者同士がどのように認識しそれを相互行為空間において表示しているか、これらのアスペクトであることがわかる。

４－３．インフォーマルな状況下での学び

最後に、本研究においてもう一つの関心点であ

る第二言語を用いたインタラクションにおける学びについても論じておきたい。上記の断片１～３の状況は、従来の典型的な「言語学習」の教室場面とは事情が異なり、PBL に焦点化した活動の中やオフ・タスク場面で、「必然的に」第二言語（日本語または英語）を用いなければその課題が達成できないというコンテクストとなっている。たとえば、サーベイを作成するにも、回答をしてくれる対象者がその言語の母語話者であれば、当然対象言語で質問を作らなければならない。しかも、しっかりと文章を成立しなければ、求める回答が得られない。このような状況下であれば、学習者自身が自発的にアウトプットにおける「正確さ」「流暢さ」などに気を配り、質の高い第二言語使用の練習の場を自らが作り出していく。PBL 学習を言語教育に持ち込むことで、このようなメリットが生まれると筆者は考えている。インフォーマルな状況下の学習は、あらゆる断片に垣間見ることができ、そしてその場面で学習が起こっている対象は授業内のタスクよりも数倍コンテクストに深く関係しながら学習者の知識（コンピテンス）の一部となる。本研究期間において、インフォーマルな場面での言語使用を多く観察を行った。それぞれの場面の状況は異なるが、言語学習を主の目的とする教室内のオン・タスク場面と異なり、どのように行動するべきか、何を言えば「正解なのか」を示すものは教科書などではなく、相互行為の展開性が提示することになる。この状況でしか学べない、ヒューマン・インタラクションの最も複雑かつ巧妙なコンピテンスの修得には、このような場にイマージョンの形で参加することが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

#1 Kataoka, K., Ikeda, K., & Besnier, N. (2013). Decentering and recentering communicative competence. In K. Kataoka, K.Ikeda, & N. Besnier (eds). Special Issue on Decentering and recentering communicative competence. Pp. 345-350. 査読あり

#2 池田佳子、古川智樹(2012).「シリーズ 大学と社会を結ぶｅポートフォリオ(第 26 回) e ポートフォリオを通じた留学生別科の日本語教育」『文部科学教育通信』299, pp.24-26.査読なし

#3 Ikeda, K. (2012). L2 'second-order' organization: Novice speakers of Japanese in a multi-party conversation-for-learning. *Journal of Applied Linguistics*, vol.5 (3):243-272.査読あり

〔学会発表〕（計 8 件）

#1 Ikeda, Keiko & Bysouth, Don
発表タイトル：
Online means audience: Turning the students' perspectives outward to the world.
学会情報：
6th Annual COIL Conference. Reimagining Education: Can Collaborative Online International Learning be Normalized?
2014.03.21
学会開催地：
Centre for Collaborative Online International Learning, SUNY Global Center, SUNY, New York, New York. USA.

#2 池田佳子、岩崎千晶、バイサウス・ドン
発表タイトル：
インフォーマル学習」を捉える--媒介物（メディア）と、空間と、相互行為に着目して
学会情報；
日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究第５回研究発表会
2014.03.17
学会開催地：
Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido. Japan.

#3 片岡邦好・池田佳子
発表タイトル（ポスター発表）：
談話的「不均衡」はいかに解消されるか
第 33 回社会言語科学学会 2013.08.18
学会開催地：
神田外国語大学

#4Ikeda, Keiko, Brandt, Adam & Bysouth, Don
発表タイトル：
Interaction in the ICT-enhanced ecology: A case study of Japanese as a second language classroom.
学会情報：
Thinking, Doing, Learning: Usage Based Perspectives on Second Language Learning.
2013.04.25
学会開催地：
Second Language Research Center, University of Southern Denmark, Odense. Denmark

#5 池田佳子、ブラント アダム、ヘーゼル スペンサー・ハバーランド ハートムット
発表タイトル：

日本と世界の国際化事情～イギリス・デンマーク・日本～
学会情報：
関西大学留学生別科開催記念シンポジウム（招待講演）
2013.03.09
学会開催地：
関西大学（南千里キャンパス）

#6 池田佳子、片岡邦好
発表タイトル：
海外の日本語教室場面における空間配置行動―マルチモーダルの視点から行う「教室分析」―
学会情報：
日本語教育国際学会 2012.08.19
学会開催地：
名古屋大学

#7 Bysouth, D., Ikeda, K., Hansen, S., Jongmi, J., Cui, L., Furukawa, T., & Bysouth-Young, D.
発表タイトル：
Attributions are for the making: a Cross-cultural, multi-lingual discursive psychological reexamination of the Heider and Simmel attribution paradigm.
学会情報：
Discourse, Conversation, Communication conference 2012.03.22.
学会開催地：
University of Loughborough, UK.

#8 Ikeda, K. & Bysouth. D.
発表タイトル：
Discursively constructed modality in Japanese conversation: A case of group discussion.
学会情報：
Acquisition of Modality symposium （招待講演）
2011.07.09
学会開催地：
University of London (SOAS)

〔図書〕（計 5 件）

#1 Ikeda, K., Bysouth, D. (2013). Japanese and English as Lingua Francas: Language Choices for International Students in Contemporary Japan. In Haberland, H.,Preisler, B.& Lønsmann, D. Language Alternation, Language Choice. And Language Encounter in International Tertiary Education. pp.31-52. Springer. 査読あり

#2 Ikeda, K.,Bysouth, D.(2013). Laughter and Turn-taking: Warranting next speakership in multiparty interactions. In Glenn & Holt (eds.) Studies of Laughter in Interaction , K, Bloomsbury, pp.39-64.査読あり

#3 片岡邦好、池田佳子(2013). 『コミュニケーション能力の諸相―変移・共創・身体化―』ひつじ書房, 査読あり　総頁数 464 頁

#4 Tateyama, Y. & Ikeda, K. (2012). *Dictogloss flow chart: Giving advice*. In Jim Ronald, Carol Rinnert, Kenneth Fordyce and Tim Knight(Eds.)Pragtivities: Bringing Pragmatics to Second Language Classrooms, The Japanese Association for Language Teachers, Pp.80-82 査読あり

#5 Ikeda,K.& Sungbae, K.(2011). *Choral Practice Patterns in the Language Classrooms*. In G. Pallotti & J. Wagner (eds). L2 Learning as Social Practice Conversation-Analytic Perspectives. Honolulu: National Language Resource Center, pp.163-184.査読あり

６．研究組織

(1)研究代表者

池田 佳子（IKEDA, KEIKO）
関西大学・国際部・准教授
研究者番号： 90447847